

# 新年のご挨拶



病院長 小池 和彦

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

今年は十干が「癸(みずのと)」、十二支が「卯」の年にあたるので、干支(えと)は「癸卯(みずのと・う)」だそうです。癸卯には、「寒気が緩み、萌芽を促す年」といった縁起の良さが表されている様です。COVID-19の発生後、停滞を続けてきた世の中に、希望が芽吹く春がようやくやって来ることを期待するところです。

昨年を振り返ってみますと、やはり新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の話題が中心になってしまいます。令和4年の新年が明けてまもなく感染の増加が見られ、第6波が始まりました。この波からは、オミクロン株のウイルスが跋扈し始め、病原性は和らいだものの感染性の亢進が著明でした。東京では2月中旬に1日2万人の感染症が報告されています。次の第7波では7月末に1日4万人を記録しています。重症者は少なかったのですが、大変だったのは病院職員の感染者が増加し、診療体制に影響が出たことでした。幸い、大きなクラスターを起こすことはありませんでしたが、現在も慎重な対応を継続しています。

令和3年暮と令和4年暮で最も変わったことは、観光地の人出や新幹線などの交通機関の混雑であったのではないのでしょうか。仕事はもちろん、レジャーでの遠出や旅行などにおいてCOVID-19初期の様な不安感、恐怖感を覚えることはなく、皆、出歩いておられた様です。ただ、海外からの旅行者受入再開、自治体による旅行支援、「外ではマスクは要らない!」といった方針を打ち出すに当たって、その方針を裏付けるデータ(エビデンス)が全く示されなかったことには、いささかの不満を抱かざるを得ません。決して方針に反対するわけではありません。国民(都民)を納得させる様な根拠をご説明いただきたいと感じたのは私だけではないと思っています。

さて、新型コロナウイルス感染症 COVID-19 のパンデミックは、ありとあらゆる方面に多大な影響を与え、同時に遠隔診療の必要性も明らかにしました。遠隔診療の応用は諸外国で非常に進んでいますが、日本は大幅に遅れをとっています。「オンライン診療」は「遠隔医療のうち、医師-患者間において、情報通信機器を通して、患者さんの診察及び診断を行い診断結果の伝達や処方等の診療行為を、リアルタイムにより行う行為」を指しています。遠隔医療の重要性、必要性、利便性は、COVID-19 のパンデミックによって明白になりました。しかしながら、現状のオンライン診療には対面診療と比較すると様々な技術的な限界もあります。このことを理解した上で、適切にオンライン診療を行うことは、患者さんとご家族のQOLに大きく貢献します。私が理事を務めている日本医学会連合では、「オンライン診療の初診に適さない症状」および「オンライン診療の初診での投与について十分な検討が必要な薬剤」を公表して、オンライン診療を含めた遠隔医療を国民の健康長寿に貢献できるようにするため、活発な議論を呼びかけています。オンライン診療が定着し、適切な医療費が算定される時期が参りましたら、当院においても取り組んで参りたいと考えています。

今年こそは、新型コロナウイルス感染症COVID-19の収束への道筋が見えると思われれます。ビヨンド・コロナ時代における生活、仕事、イベント、社会の在り方、医療の在り方などに思いを馳せながら、現在取りうる対策を遵守して参りましょう。